

SINCE 1962.



玉川大学 体育会弓 道部60周 年記念誌

玉川大学体育会弓道部梓会

SINCE 1962.



完成間近の道場 1966

SINCE 1962.

- 部長先生より
- 師範より
- 弓道部の歴史
- OBOGインタビュー
- フォトライブラリ
- 梓会会長から



部長先生より

SINCE 1962.



弓道部60周年にあたって

玉川大学体育会弓道部部长
相原 威

玉川大学体育会弓道部、創部60周年、おめでとうございます。

私は、平成18年(2006年)に弓道部の部長をお引き受けして、現在は令和4年(2022年)でありますので、今年で16年になります。卒業生一人一人の思いではすべて今も鮮明です。練習の時、弓道大会、リーグ戦、そして夏・春合宿の記憶は、時間が止まったようにその瞬間の光景がよみがえります。そこで、玉川大学の弓道部において私が感じたこと、そして学生に話したことを、創部60周年を記念して、ここにご紹介させていただきたいと思います。近年の玉川大学の弓道部を感じていただければ幸いです。

(1) 「弓を引く十瞬の輝き」(弓道部HPの部長の言葉 2007年)

“それまでずいぶん長く見ていなかったような気がする。昨年の四月に弓道部の部長を引き受けてからいつも思うことだが、部員一人ひとりの弓を引く直前(会から離れ)の一瞬、いやおそらくもう少し長い十瞬と言っているだろう時に、皆の顔にその真剣さと気持ちの集中が頂点となって現われる。弓を引くときのこの瞬間は目を見張るものがある。礼と儀にのっとり技を磨く心技一体の合一が生み出すものであろう。現代の学生に欠落している真剣さの輝きがそこにある。私は、その顔を見るのがとても好きだ。見ているだけで気持ちが洗われ、すっきりとした気分になれる。自分自身は忙しさを言い訳として、弓を始めて間もなくまだ希薄な時が流れている。しかし、練習を見守ってその場を共有できることは、私にとってとても素晴らしいことであると感じている。弓を引く皆の顔が好きだ。”

—以上は、私が玉川大学の弓道部で入部から現在までずっと変わらず感じてきたことです。学生からは多くのことを教えてもらいました。

(2) 次は、夏合宿参加する学生に向けて書いた、私からの応援です。

「夏合宿にあたって」(夏合宿のしおりの巻頭言)

【夏期合宿では、それぞれが自分に合った目標を立てて練習を行っていくことが不可欠です。半日ごと、1日ごと、そして合宿全体の①達成可能な1ランク上の適度な目標を立てることがポイントです。小さい目標を一つ一つ達成することが、次へのやる気に繋がります。是非、着実に自分の立てた目標を実行できるよう、実力を伸ばしてください。そして1つのチームとして、さらなるレベルアップを

部長先生より

SINCE 1962.

目指してください。

夏期合宿では、技術を磨くことは大きなテーマですが、精神力を磨くこともその一つです。自分の神経を図太くするには、練習に練習を重ねた技術的熟達による自信が大きな一因となります。そしてさらに力になるのが、信念です。誰だって不安を持っていますが、その不安を打ち破れるのは信念です。信念とは、目標に対して「達成したい」「達成できればいいな」ではなく「絶対達成してやる」という前向きで確信的な気持ちです。自信は崩れることがあります。信念は思い込みであるので崩れることはありません。ですから、②強い信念を持って臨むことが重要です。

また、「弓道は礼に始まり礼に終わる」という西井師範のお言葉にあるように、武士道の中で最も重要とされるのは、③礼儀作法を通して技術と精神力を磨くことです。そして、それこそが玉川大学弓道部が目指す、技術だけではない人間形成につながる弓道の魅力であることを意識してください。

どんな些細なことや、その時は役に立たないと思われることでも、葛藤を繰り返しながら全力で一生懸命やれば、必ずその人の糧となり、人間的成長につながります。そして、その成長のプロセスで出会った仲間とともに過ごす時間を大切にしてください。後から思うと、今が大切な「人生の時」なのです。この夏合宿を通して、仲間とのしっかりとした絆が必ずできるはずです。】

---卒業生の皆さんには、夏合宿・春合宿のことを思い出していただければ幸いです。

上記の感想と応援はずっと変わりません。これからの弓道部のさらなる発展をお祈りしたいと思います。



師範より



弓道部60周年にあたって

玉川大学体育会弓道部師範
西井義昭

この度、弓道部創部60周年記年を迎えられたこと、誠に喜ばしく心よりお祝い申し上げます。60年間の長きにわたり、会員の皆様はじめそれぞれの時代に汗を流されてきた歴代幹部のご尽力と、弓道部発展のために傾けてこられたその情熱に敬意を表し、深く感謝を申し上げます。

顧みますと、小生が町田市弓道連盟にて会長を務めていた18年前の平成16年(2004年)、当時玉川大学弓道部長でいらした伊藤和憲先生にお目にかかった際に、「弓道部の師範を引き受けてほしい」とのお話がありました。歴史ある玉川大学の道場で小生が指導とは大変畏れ多いことでしたが、与えられた機会に感謝するとともに自分自身の修練のためにも、と思いお引き受けいたしました。当時梓会会長を務めておられた高橋金一様お一人が後輩の面倒を見られていましたこと、感服していました。そして、当時から今に至るまで、若い皆さんと共に弓を引く機会をいただけてきたことに、感謝の念は尽きません。

さて、ここで小生が敬愛する二人について書かせて頂きます。お一人は、玉川学園創立者小原国芳先生です。道場に掲げられた額にある「至人無私」、この額を仰ぎ見て日々修練したことは小生の宝となっています。

もうお一人は初代師範石岡久夫範士九段です、50周年記念誌にも書かせていただきましたが、全日本弓道連盟の重鎮でもある石岡先生がお書きになった「私の弓道修行」、皆様もぜひご一読されることをお勧めいたします。

自分の務めは、小原・石岡両先生の文武両道精神を少しでも学生の皆さんに伝えていくことであろうと考え、日々修練してまいりました。弓道は長い歴史と伝統によって培われてきた武道であり、それだけに奥行きが深く、奥義を極めることは大変難しくもあります。しかし一方では、「やり甲斐のある武道(スポーツ)である」とも申せましょう。

石岡初代師範は、「弓道の動作が『礼に始まり礼に終わる』ということだけでなく、人生における家庭生活や社会生活を、これによって如実に体験しているということである。我々は自らの生命をよりよく育てながら人間生活のよりよい姿勢を、弓道によって見出そうとしているようなので、

SINCE 1962.

師範より

私は弓道のもつ社会哲学を正しく身につけることを念願しているのである」と書かれています。

小生は小生なりに、これを在学生および卒業生の皆様に全力でお伝えしてきたつもりですが、どれだけ皆様の心に届けることができたでしょうか。

末筆ではございますが、部活(教育)指導された前部長伊藤和憲先生、現部長相原威先生に心より感謝申し上げます。玉川大学体育会弓道部におかれましては、この60周年を契機としさらなる躍進と会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。



SINCE 1962.



道場開き 1966

SINCE 1962.

弓道部の歴史

- 1962年 厚井義正さん・山内（西野）和子さんにより和弓がはじまる
（当時まだ道場は無く、洋弓場を使用していた。）
- 1964年 門脇朗示先生が部長に就任
- 1966年 道場完成・道場開き
石岡久夫先生が師範に就任
- 1967年 和弓班・洋弓班に分かれ独立運営が始まる
- 1968年 男子東京都学生弓道連盟に加盟
和弓部・洋弓部の独立が決定
青柳茂雄先生が部長就任
都学連リーグ戦（VII部）に参加
- 1969年 小原学長を招待して初射式開催
弓道部OB会「梓会」結成
- 1970年 「玉川大学体育会弓道部」に改称
- 1971年 女子東京都学生弓道連盟に加盟
全日本弓道連盟に正加盟
- 1984年 門脇朗示先生が部長に再就任
- 1986年 似内昭夫先生が部長に就任
- 1991年 女子リーグIII部昇格（歴代最高部）



弓道部の歴史

SINCE 1962.

- 1996年 立川雅也先生が師範に就任
- 1997年 伊藤和憲先生が部長に就任
- 2004年 男子リーグIII部昇格（歴代最高部）
- 2004年 西井義昭先生が師範に就任
- 2006年 相原威先生が部長に就任
- 2022年 創部60周年を迎える





SINCE 1962.

OB OGインタビュー

SINCE 1962.



石岡師範との思い出や
学連を担当して得たこと・・・

昭和59年度卒業
高橋金一



スキャンして
動画を再生



道場のすぐ横には
牛がいた・・・！？



OB OGインタビュー

SINCE 1962.



全関4位の成績は野中コーチの
車送迎のおかげ・・・！？

令和元年度卒業
溝端いずみ



スキャンして
動画を再生



弓道部の仲間が社会に
出てからの心の支えです。



OB OGインタビュー

SINCE 1962.

60周年を迎えて

昭和41年度卒業

大古殿 巖

梓会の皆様、創部六十周年記念誠にありがとうございます。卒業してから半世紀を経った今もこの様に母校と関係が続いている事、とても嬉しく思います。

私は1963年（昭和38年）出来たばかりの工学部の第二期生として入学致しました。高校時代と同じ運動部が無かったので弓道部へ入部致しました。場所は小田急電車から見える、元高等部グラウンドの片隅の小さな小屋が部室でした。総勢二十名程。洋弓と和弓に分かれており、和弓は厚井先輩と西野先輩等に2～3名のみ。そこへ私達が2～3名加わり、青空天井の下で練習しました。

何とか道場が欲しいと厚井先輩が関係部署のあちこちに粘り強い陳情を続けて下さり、一年程後に現在の地に決まりました。当時の小原国芳学長も弓道の経験があり、和弓に対して大きな理解があったと聞きました。当時の今の場所は小高い丘の狭間で、ススキや灌木が生い茂る虻の出そうな湿地帯。そこに和弓、洋弓、ゴルフの練習場が計画されました。

しかしそれからが大変でした。昭和四十年の初夏、全員練習時間を半分で打ち切り、各自が鎌や鍬やスコップ、鶴嘴など手にしての整地作業を半年以上続けました。工事機械類は無くすべて人手による労作作業でした。やがて道場建築が始まり、私は工学部の窓より毎日工事の進み具合を眺めておりました。

そして完成。昭和41年6月19日、小原学長、石岡範士をはじめ関係者7・80名の人々が集まっての落成式、道場開きを挙げて出来ました。これは今も忘れ得ぬ大きな思い出です。しかしその時私はもう大学四年生。卒業論文の準備と就職活動が始まっており、道場での練習はおろか昇段試験も対外試合も何も経験する事無く卒業しました。しかし春と夏の秩父小澤道場での合宿や、新入生歓迎の奥多摩でのバーベキュー大会等たのしい思い出も多く残っております。

現在の年齢になっても大して直っていないかもしれませんが、小学中学高校時代の私は誰にも負けぬ程の短気、せっかちですぐ頭に来る性格の男でした。いつもこれで失敗し、その都度自己嫌悪に落ち入り、何とかこの性格を直したいと思い、悩んでいました。ところが弓道を始めた途端、自分の性格ゆえの弱さに苦しみ、性格改造の必要性を痛感しました。

OB OGインタビュー

SINCE 1962.

射法八節の「会」と「離れ」がうまくいかず自分に負けていました。「静」の中で自分と向き合わざるを得ない事を教えてくれた弓道でした。上達する事無く卒業した為、改造も不十分でしたが、その後少しは自分と向き合う大切さが理解出来たと思っています。ある人に教えられ、夏の夕方一人こっそり道場へ行き、的の上に口ウソクを燈して心を集中させた事もありました。

私はすでに後期高齢者になり、現役生とは50～60歳の年齢差があります。世相も大きく変わり、助言が通用する事も有りませんが、ただ一つ。弓道をやろうと決心して入部した以上は「卒業まで続けて欲しい」という事です。私達の頃にも多くの人が途中で止めて去って行きましたが.....。学生時代という限られた時間はとても貴重な時です。ここで、弓道という武道でしか得られぬ「静の中で自分に向き合い、自分自身を知る」事をもって、実社会へ飛び出して行けるすばらしさを体得して下さい。弓道は相手がいない個人で出来るスポーツです。そこで自分の長所と短所を知り、広い世界で活躍して下さる事を祈念いたします。

OB OGインタビュー

SINCE 1962.



真・行・草

平成5年度卒業
亀岡英司

弓道には「真・行・草」で表現される作法があります。これは弓道に限ったことではなく日本古来の伝統芸能や「道」のつくものには多く見受けられます。元々は書道からきている表現であり、「真書」は楷書や正書を表し「草書」は風雅な書体、いわゆる「崩し字」のもっとも芸術性の高い書体を表します。「行書」はその中間にあります。本学OBに書家（自称）がおられるようですので詳しくはその方にお聞きください。

弓道の作法においても同じ意味があり、「真」を会得してから「行」「草」へと自然に移行するものであるとされています。現代弓道ではこれらの本当の境地を目指す弓引きは皆無と言ってもいいのですが、これらは何も作法に限ったことではないことを弓道は教えてくれます。「弓を引いて矢を的に飛ばす」ということ自体は永遠に変わることはありません。しかし、経験と修練を積んで段位や称号が上がっていくにつれ、当然ながら「結果」のみならず「内容」を求められるようになるわけです。そのように先の見えない「けもの道」を登っていくと不思議なことに、いつしか違う景色が見えていることに気づきます。より上の景色はまだわからなくても、自分の経験してきた道程というのは実によく理解できるようになります。これまですごく「上手だなあ」と思っていた人の弓が「意外にそうでもない」というように見えてきたり。反対に「この人称号持ちなのになんで中らないの？」と思っていた人が、じつは崇高な目標を持っていることに気づかされたり。本質が見えていなかったのは自分のほうだったわけです。

弓道の作法はとても奥が深く、こと簡単な動きほど熟練度が「品格」として表現されていきます。しかしそれには見る人の目とその段階にないと気づかない「無意味」ともいえるものです。結局のところ、引く側も見る側も「真」を追い続けることで高めあい、いつの間にか「行」や「草」になっていくものなのでしょう。

そしてひとつ確かなことは、どんなに優れた指導者に教わっていても、自身が苦労してたどり着いた経験から身につく以上のことはないということです。もちろん語弊があってははいけません。自己流だけでは下手になるだけであり、正しい知識は不可欠です。しかし教科書のように「正解」を教わったらその通りできるほど弓は簡単ではないことはご周知のとおりです。

OB OGインタビュー

SINCE 1962.

本学弓道部が60周年を迎えるにあたり、現役の皆さんにお伝えしたいと思います。まず、数ある選択肢の中から弓道部を選んでくださってありがとうございます。学生のうちはあまり手に取ることはないかもしれない「弓道教本」、その中に「射即生活」などと書かれています。弓が教えてくれることは一般社会にも役立つことがたくさんあるという意味です。皆さんも思い当たることがあるでしょうか、私のような僻地での仕事上のお付き合いの中でも、知識の豊かさやお話の深さに引き込まれてしまうような方に出会うことがあります。この方はどのようにしてここまでたどり着いたのだろうと想像するだけで身震いしてしまいます。そんな人と対等に話をするには自分の未熟さしか感じません。人生の中でぶち当たるであろう多くの問題に「正解」のみを近道で欲しがってばかりいてはそんな人の境地に達することはできないのでしょうか。たぶん・・・。

そう、つまり弓の道と生活の道はとても似ていますね。昨日の練習ではできたことが今日にはできなくなって、努力を繰り返して何かをつかんでいく。弓を引く限りこれはずっと同じです。卒業して弓を続けるかどうかはともかく、この貴重な4年間を一生懸命、そして楽しく過ごしてください。将来、忘れたころに役に立つことがきっとあります。

私自身も、弓においても人生においても、自分で「草」を表現するときなど来ないと思いますが、自分なりの「真」を追いつけていくことには意味があると信じてやみません。



2018 03 23

OB OGインタビュー

SINCE 1962.



弓道部60周年

平成21年度卒業
中村(金成)いずみ

・学生当時の思い出

大学を卒業していつの間にか10年以上が経過してしまいましたが、今改めて現役時代を思い出すと弓を引いている瞬間よりも、一年生の時の仕事や部員とのやり取りの方が印象に残っています。

具体的には、今でも鳴きをするときのドキドキは忘れられませんね。看的で的出し用の的を握りしめ、射位の部員達が三人同時に会に入った時「ちょっ、同時に離れはやめて!」と心の中で悲鳴をあげていました。笑い話ですが、卒業してからもこの地味なシーンを何度が夢に見ました。困みに、かけを忘れて射位に入る夢を今でも時々見ます。焦って目を覚まします。どうせなら皆中する夢を見たい!

それから、私が現役の時に応援がありました。道場でめちゃくちゃ大きな声で会に入る寸前まで応援をするんです。私は高校生の時も弓道部に所属しており、静かな道場で練習するのが元々は当たり前でした。なので、大学の道場に見学に行ったらビックリしました。私はどちらかというと熱血派だったので「こんなに弓道で応援したりしてもらったり出来るの!? 熱い!!」と思い、あんまり真剣に考えていなかった弓道部への入部を決めました。試合も、誰よりも大きな声を出して、応援している気持ちを本気で届けようとしていました。あれほど人生で大きな声を出したことはありません。応援、楽しかったです。今でも道場内で響く仲間の声と返事をする自分を思い出すとワクワクしちゃいます。

・弓道部で培った経験が社会に出て活かされたこと

このテーマに関しては、自分の努力の上限を知れた事がその後の生活で役に立ったかと。私の場合は弓道でしたが、受験とか他の事でも同様だと思います。出来る限りの努力をしたという経験は社会人になってから何かにチャレンジする際、『自分はある時あのくらい頑張れたから、今の私はまだ努力できる。頑張れる!』と、自分を鼓舞するのに役立ちました。

私は昼休みや練習後に自主練をしたり、研究室で実験をやった後や就活後に走って道場に行き練習に参加したりしていました。あの頃は女子では一番になって男子も抜いてやるって常に考えていました。そんな現役時代の自分を思い出して、「あの時より頑張れているかな?」「もっと出来るんじゃない?」と比較して、今の自分のやる気や本気度を確認しています。

OB OGインタビュー

SINCE 1962.

他にはコミュニケーション能力が身に付きました。年齢の離れた先生方やOBOGさん、様々な考えを持つ部員と時には楽しく、時には真剣に会話をした経験はそれ以前にはないものでした。社会人になってから年の離れた上司とコミュニケーションを取る事に抵抗を感じず、先輩や後輩ともそれなりに良い人間関係が築けたのは弓道部での経験のお陰ですね。

・弓道部や現役生への想い

卒業しても私は玉学の弓道部が大好きです。一本でも多くの的に当てる事を毎日のように考えて、仲間と過ごした日々はお世辞抜きで人生の宝物です。練習も試合もそれから飲み会とかも全部が全部楽しかったと今は思えます。そう思えるのは、自分なりに本気で弓道に取り組んでいたからです。中途半端な気持ちで適当にやっていた事って暫く経つとほとんど忘れちゃいます。

一生懸命取り組んだことはやればやる程ゲームの様に貴方に経験値をくれます。経験値は社会に出るとそのまま貴方の装備品に変化します。成功経験が剣になり、失敗経験が盾になり、様々な考えの人間と関り悩んだ経験がその後の人間関係を円滑にする魔法になります。今の内に本気で頑張る事に挑戦してみてくださいはどうか？

社会に出た時に「自分はこれだけの装備があるからどんな場所でも大丈夫！」と思える経験が出来るのが弓道部だと私は思っています。同じ釜の飯ではないですが、同じ道場で過ごした者として、現役生をいつまでも応援しています。















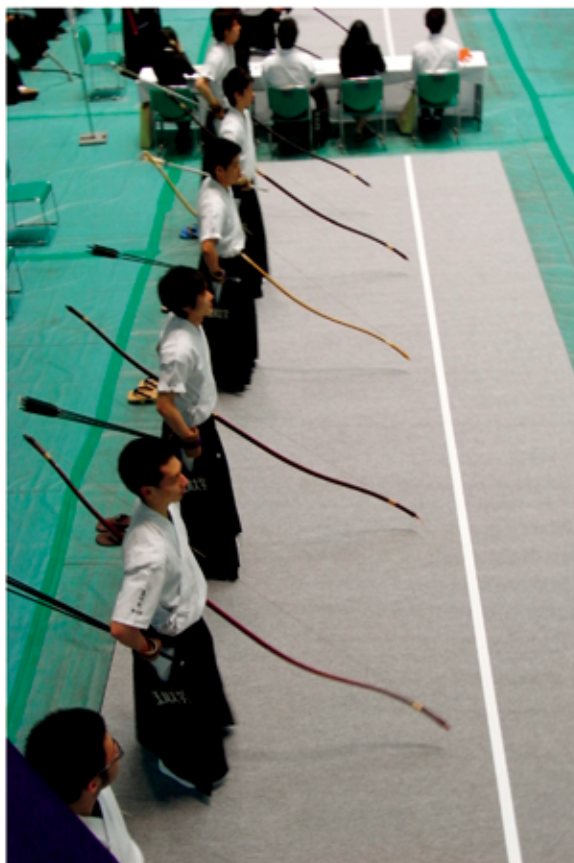












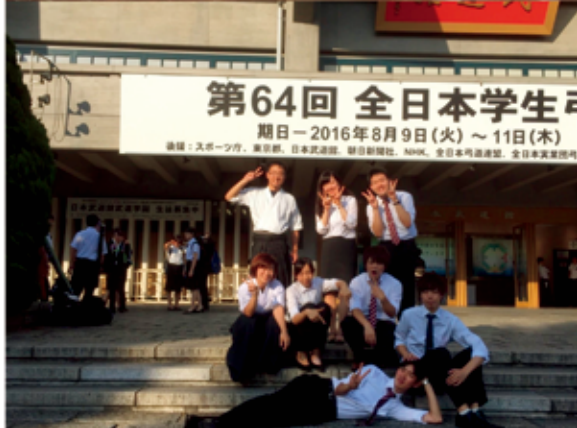




女子個人入賞者
四位 森島 芳 (玉川大学)
五位 土川 正純 (神戸大学)











梓会会長から

SINCE 1962.



60周年を迎えて

梓会会長
渡辺 章

弓道部創立60周年誠におめでとうございます。これまで弓道部が長きにわたり存続、発展できたのはまだ道場が無い創立当時の先輩方の労作、ご苦勞の賜物であると心から感謝を申し上げます。また師範の先生、歴代の部長先生、多くの卒業生に厚く御礼を申し上げます。

私事ですが弓道部に入部したきっかけは小原國芳先生の弓を引く写真を拝見した時にとっても心を惹かれ弓道の魅力をまさに肌で感じたものでした。今も道場に飾られている「会」の写真を見るたびに当時の思いがよみがえってまいります。

当時の弓道部はまさに体育会で上下関係が厳しく1年の時は2年生が教育係で、事あるごとに道場で一時間正座し説教 一人の不祥事は全体責任 当時の風潮としてトレーニング中は一切水を飲むことは禁止、走っている途中で疲れて座ると痔になるなど、今思うととても考えられない事ばかりでした。しかし、その厳しさもリーグ戦で勝ち抜き昇部する事が目標であったと後で聞かされ少しは納得した次第です。

先輩から教わる内容に戸惑いながらも弓を引く機会を与えられ、体力には自信があった筈が普段使われていない筋肉を使う事を教わりそれから筋力作りに励む全くの初心者でした。それから毎日のように道場へ稽古に行き始めた頃、毎週土曜日に國學院大學から師範の石岡先生に道場にお越しいただきとても貴重なご指導をいただきました。今でも記憶に残っています射法八節の1番動作「足踏み」では、毎日通学で乗る揺れる電車の中でつり革や手すりを使わずに太ももに力を入れて引き締めお尻をキュッとつぼめて立つ練習をするという等と優しい笑顔で教えてくださいました。今でも電車に乗った時に思い出して足腰を鍛えるようにしています。

また、「手の内を読む」「手ぐすねを引く」「的中」など弓道から由来した言葉の解説をいただき、より弓道が身近に感じ弓を引く楽しさを教えてくださいました。本当にありがとうございました。

そして後輩が入部して教える立場の難しさも経験しながら、当時4年生まで合わせておよそ50名で百射会、全関東、全日本、リーグ戦などに向けお互い切磋琢磨し向上心を持って活動していたことが今でも懐かしく思い出されます。そして何よりも4年間とおしてかけがえのない仲間と出会えた事が私の財産です。

梓会会長から

SINCE 1962.

また社会に出てからは、正射必中、平常心、玉川のモットーがより大切だと思っております。まだまだ未熟で反省の日々を送る私ですが生かされている人生いろいろな事に挑戦し、いつまでも夢を持ち続けていこうと思っております。

さて今の現役生の多くはコロナ禍により入学式から授業、クラブ活動に至るまで私たちが過ごしてきた大学生活とは全く違いリモート学習、クラブ活動は中止、5人以上の食事会は禁止など対面しないことが多く、友人を作るのが難しく大変辛く苦しい思いをされてきたことでしょう。でもそのような中、決して諦めず全員で努力、工夫し合宿、リーグ戦等ここまでやってこられたのはとても喜ばしい事と思います。これからも微笑みを以ってあらゆる困難を乗り越えて前進してください。

そしてこの60周年を期に時代に即応した弓道のあり方を模索し梓会と共に創りあげていきましょう。

玉川大学体育会弓道部創部六〇周年記念誌

発行 令和四年十一月

著者 玉川大学体育会弓道部梓会

編集 根本充康

発行所 玉川大学体育会弓道部梓会

印刷・製本 株式会社伊藤バイナリー

